

地域住民－地域外参加者関係からみる 江戸・東京の祭礼史

三隅 貴史 (MISUMI Takafumi)

関西学院大学大学院 大学院研究員

takafumi.misumi@kwansei.ac.jp

東京圏の祭礼の特徴

2

東京圏の祭礼といえば、多くの人が神輿と神輿渡御とを想像するだろう。しかし、東京圏の祭礼のように大量の神輿が担がれる祭礼は、東京圏外ではあまりみられない。

(写真)

- 三社祭（東京都台東区）と
八戸三社大祭（青森県八戸市）
との形式・物質性の差異

①：この差異は、どのような歴史にもとづいて形成されたものなのか？

②：この差異によって、東京圏の神輿渡御はどのような方向に向かうことを規定されているのか？

江戸・東京の祭礼史

発表者は、地域住民を中心とした祭礼運営組織と、地域外参加者との関係性に注目する視点から、以下の祭礼史を提示する。

町神輿以前：山車を中心とした形式性の時代
(天下祭が成立する1688年～1890年代)

第1期：町神輿の発明と権威的配分の時代
(1900年代～1950年代)

第2期：町会と神輿会との闘争の時代
(1950年代後半～2007年)

第3期：社会一祭礼関係の時代
(2008年ごろから)

1. 町神輿以前

—山車を中心とした

形式性の時代—

天下祭のありよう

6

この時代の大規模な祭礼は、神田神社の神田祭と、山王神社の山王祭である（天下祭）。天下祭は山車や仮装行列などが中心行事であり、神輿渡御は中心行事ではない。

代表的な祭礼＝天下祭

幕府が神田明神と日枝山王の祭礼を庇護

1688年に曲輪内への入場を許可し、天下祭が成立

（秋野 2018）

天下祭と山車・仮装行列

祭礼は山車や仮装行列が中心（岸川 2017a: 35）

江戸の山車について、京都を模倣したものだという主張（作美 1996）

→この時期の東京の祭礼の形式・物質性は、
全国の山・鉾・屋台祭礼と同様

宮神輿の担ぎ手と助人足之儀

7

神田祭の宮神輿渡御には、氏子が自由に参加できるわけではなかった。しかしここでは、都市下層民による乱入（助人足之儀）がしばしばみられた。

天下祭りにおける宮神輿

神輿の担ぎ手は、一部の町民に限定されていた

助人足之儀（すけにんそくのぎ）

宮神輿の渡御では、都市下層民による乱入がみられた
（たとえば、1845年神田祭）

幕府はこれを悪例とし、威信をかけて規制を強化

（このスライドは牧田 1991の議論にもとづく）

小括：幕府の管理と形式性

8

助人足之儀にたいして幕府は、威信をかけて規制を強化した。結果、乱痴気騒ぎは影を潜めることとなった。そして、天下祭の神輿渡御は、形式的な側面が強調されていった。

規制強化後（1847年）の神田祭

幕府の威信をかけて管理された結果、決められた人びとによって、しずしずと担がれた。形式的な側面が強調されたと総括できる

：一方で、同時代の周辺地域の小社の祭礼における神輿渡御は、専門神職によって統制を受けず、結果として、都市下層民が入り乱れる乱痴気騒ぎ的なものであった

（このスライドは牧田 1991の議論にもとづく。）

2. 町神輿の発明と 権威的配分の時代

山車の廃絶

10

1890年代には、資金面の問題などで山車を出せなくなった町会が数多く発生し、祭礼において山車がみられなくなっていった。

明治維新後の山車の廃絶（岸川 2017a）

1890年ごろまで、山車が健在



都市構造の変化や幕府の庇護の消失、風雨による破損などの結果、資金面の問題もあり、山車が廃絶
(1890年代)

山車が失われるなかで、1900年代に地域組織が所有・管理する町神輿が発明され、30年ほどのあいだで東京圏において普及するに至った。

山車の代わりとなる、町神輿の発明

- 宮神輿：神社が中心に保有・管理、神事を中心となる
- 町神輿：地域の祭礼運営組織である町会が保有・管理

町神輿普及のきっかけ：1909年の深川八幡祭り
(岸川 2017b)

これ以降、東京圏においては、山車ではなく、
町神輿が町会の祭礼の賑やかしの中心に

権威的配分の成立

町神輿と町内神輿渡御が誕生し、町会の成員にとって、自らの手で運営可能な神輿渡御がはじめて実現した。これによって、町神輿渡御における権威的配分もまた、はじめて成立した。

神輿の担ぎ手

- 宮神輿（神田祭）：日雇い人夫など（岸川 2015）
- 町神輿（三社祭）：地域の若者、地域企業従業員

一定年齢以上の旦那は、神輿を担ぐことなく、見学
(すでに地域外参加者に寛容な雰囲気?)

権威的配分と共同性の初成立：

町会による権威的配分と共同性（＝町会が神輿を管理し、地域の人びとに目立つ場所などを配分することをとおして、祭りが盛大であることを内外に表明し、満足感を得る）の初成立

町神輿の発明が、東京の祭礼のありようが大きく変化したきっかけである。これが、同時に動く神輿の数が多く、それを支える地域社会の人口が少ない環境を成立させた。

- 町神輿の発明により、東京の祭礼と他地域の山・鉾・屋台祭礼とのあいだに差異が生じた
- 同時に動く神輿の数が多く、一つの神輿を支える地域社会の人口が少ない環境も成立

→東京の祭礼には、より多くの担ぎ手が必要
かなり顕著な、担ぎ手側の売り手市場が成立

第2期における神輿会の誕生・発展と闘争の火種に

3. 町会と神輿会との 闘争の時代

祭礼の衰退

15

終戦から1950年代後半までは、神輿渡御が復活していった。しかし60年代半ばになると、一度盛り上がった祭礼への盛り上がりは薄れ、行き詰まりの可能性をみせはじめた。

戦後の復興（1947年頃～50年代後半）

東京復興の象徴として、焼失した宮神輿や町神輿が作り直され、神輿渡御が復活していく

その後の衰退（50年代後半～60年代後半）

一度盛り上がった祭礼への盛り上がりが薄れる
東京都東部地域での人口減少

→約40年前に成立した担ぎ手が多く必要な宮神輿+町神輿祭礼は、はやくも行き詰まりの可能性をみせる

神輿会の誕生

16

このような環境のなか、仲間と神輿を楽しむことを目的とする神輿会が結成され、東京都東部地域から少しずつ広がっていった。

東京における神輿会の誕生

- 195X年、東京都東部地域において、地域の若者たちが中心となり発足
- 祭礼で神輿を担ぎ、仲間たちと楽しむ活動を実施

神輿会＝年に複数回、祭礼やイベントで神輿を担ぐことを続けている神輿愛好家による集団（定義）

60年代には、祭礼が盛んな地域で、神輿をこれまで担いできた若者男性を中心に、神輿会が設立される

神輿会とはどのような集団か

17

神輿会は現在、東京圏に900団体以上存在している。東京圏の神輿会は、とくに社縁・選択縁を中心に結成されていることに特徴がある。

東京圏の神輿会

- 東京圏に現在、900団体以上存在
- 日本最大の地域外参加者のネットワーク
- 社縁・選択縁を中心に結成されている会も多い
(たとえば、中学校・高校単位など)
- ブルーカラー男性(40代)を中心的な成員とする
「不良文化」とのつながりも強い
- 地域の人よりも場数を踏んでおり、神輿担ぎの技術に熟達している
(神輿を乗っ取れるだけの能力がある)

神輿ブーム

18

東京圏の神輿渡御は、1970年代半ば～80年代半ばにきわだった隆盛をみせる。そして、希少性の上昇と担ぎ手の増加が、混乱を引き起こしていく。

(画像)

「特集 江戸の下町」

- ・「ディスコにいくのもあきたから」
- ・「見ているだけじゃつまらない あなたも神輿に挑戦！」
- ・「“おねえさん、粋だねえ！”なんていわれたい…」

『女性セブン』1978年7月13日号

神輿会による無秩序

19

神輿会は、数の優位に任せて地域住民を暴力で抑えつけ、神輿を管理不可能な状態に追い込んだ。これによって、町会による権威的配分と共同性が崩壊した。

無秩序への志向

神輿会という地域外参加者が、地域住民を暴力で抑えつけ、神輿を管理不可能な状態に追い込み、目立つ場所を暴力で奪い合うことに熱中していく
(「陣取りゲーム」などと称される)

町会による権威的配分と共同性(=町会が神輿を管理し、地域の人びとに目立つ場所などを配分することをとおして、祭りが盛大であることを内外に表明し、満足感を得る)の崩壊

町会による対抗実践

20

町会による権威的配分と共同性が崩壊したことを受けて、町会の祭礼の運営組織は、それを取り戻すための対抗実践を行なっていた。

対抗実践

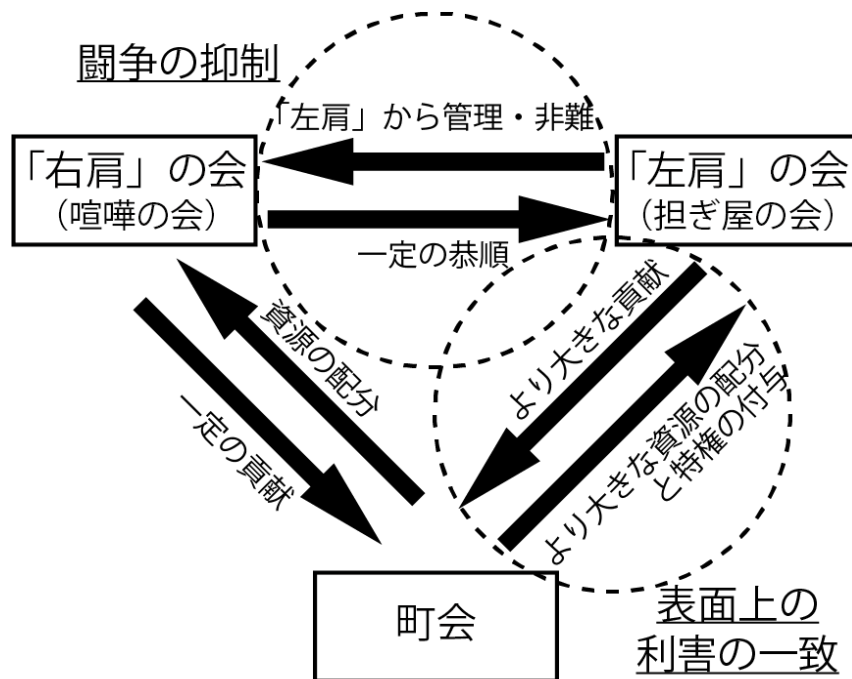
- 青年部の(再)組織化
- 神輿会を管理するための技術：
非協力的な神輿会の排除・「棒振り」・「仕切り」

対抗実践を支える標語：

「祭りは町会のためのもの」

神輿会との対抗関係のなかで第一期における祭礼のありようが参照されている

対抗実践を内面化した神輿会が誕生し、三者関係が成立した。三者関係とは、町会－町会に協力的な神輿会－自己充足を優先する神輿会の関係が成立し、権威的配分が再成立したことをさす。



(画像)

- 三社祭における「神輿乗り」などの、浅草神社奉賛会側が禁止している行為

神輿会の誕生と普及によって、地域外参加者の乱入による無秩序の時代に突入した。町会と神輿会との闘争の時代を経て、現在は、神輿渡御における権威的配分がふたたび成立するに至っている。

神輿会の誕生と、地域外参加者参加の増加



暴力と無秩序、「戦国時代」への突入



町会の対抗実践と神輿会との闘争



権威的配分と共同性の再成立

神輿の担ぎ手が非常に多く必要な環境があるから、このような状況が生じたとまとめられる

4. 社会－祭礼関係 の時代

社会－祭礼関係の時代とは、闘争が町会－神輿会とのあいだで生じているというよりも、主催者・非参加者－参加者のあいだで生じている時代のことをさす。

社会－祭礼関係の時代

祭礼という、現代社会の秩序とは異なるもう一つの「秩序」を有するものを、現代社会の秩序（主催者・非参加者と親和的）から位置づけようとする時代
(芦田 2001が最初期に提示)

- ✓ バブル崩壊後の新住民比率の上昇と批判の増加
- ✓ 東京都暴力団排除条例の制定（2011年）
- ✓ 浅草神社とX寺院との関係悪化

など

近年の神輿渡御では、神聖化戦略がみられる。これは、自治体や宗教団体などが、祭礼の高尚な意味を強調する言説を多用することで、秩序化を試みる戦略である。

(写真)

- 奉祝系神輿パレードにおける、「神聖化」戦略

5. 結論

(写真)

- 三社祭（東京都台東区）と
祇園祭（京都府京都市）との
形式、物質性の差異

Q：この差異は、どのような歴史に
もとづいて形成されたのか？

A：帝都としての東京の発展や、
幕府の庇護の喪失などを原因とした、

- 山車の廃絶（1890年代）
- 町神輿の発明（1900年代）

によって、形質・物質性の差異が生じた

Q：この差異によって東京の祭礼は、
どのような歴史を辿ったのか？

A：売り手市場が成立することによって、

- 神輿会の誕生と著しい発展
- 町会と神輿会との闘争
- 闘争における町会の苦戦

が規定されたとまとめられる

発表者は、地域住民を中心とした祭礼運営組織と、地域外参加者との関係性に注目する視点から、以下の祭礼史を提示する。

町神輿以前：山車を中心とした形式性の時代 (天下祭が成立する1688年～1890年代)

第1期：町神輿の発明と権威的配分の時代 (1900年代～1950年代)

第2期：町会と神輿会との闘争の時代 (1950年代後半～2007年)

第3期：社会－祭礼関係の時代 (2008年ごろから)

参考文献

芦田徹郎, 2001, 『祭りと宗教の現代社会学』 世界思想社.

秋野淳一, 2018, 『神田祭の都市祝祭論：戦後地域社会の変容と都市祭り』 岩田書院.

岸川雅範, 2015, 「神田神社境内の変遷と神田祭：祭祀・祭礼空間の持続と変容」 藤田大誠・青井哲人・畔上直樹・今泉宣子編著『明治神宮以前・以後：近代神社をめぐる環境形成の構造転換』 鹿島出版会, 287-323.

岸川雅範, 2017a, 『江戸天下祭の研究：近世近代における神田祭の持続と変容 神田明神選書5』 岩田書院.

岸川雅範, 2017b, 「神輿の近代：大正期に盛り上がった東京の祭礼」 國學院大學学術資料センター編『神輿文化を考える』 國學院大學学術資料センター, 53-71.

作美陽一, 1996, 『大江戸の天下祭り』 河出書房新社.

牧田勲, 1991, 「江戸の神輿と領主法規制：神輿昇をめぐる法と無法」 『京都民俗』 9: 1-29.